

からくりと式亭三馬の滑稽本

山 田 和 人

はじめに

からくりは、当時の諸ジャンルと深い関わりを持っており、竹田からくりを中心に芸能、演劇にとどまらず、浮世草子、俳諧、浮世絵、見世物、遊戯関連資料等に及ぶ^①。竹田からくりは、上方のみにとどまらず、江戸下りを繰り返しており、江戸の文芸にも深く浸透している。それは我々の想像以上であり、いわばからくり文化史とも言うべき裾野の拡がりを指摘することができる。そうした実態を探るためには個々の事象を具体的に検討していく必要がある。それによって、からくりの演技や演出を探る手がかりを提示できるとともに、からくり文化研究の糸口にしていくこともできるだろう。本稿では、滑稽本を取り上げて、からくり研究の側から、主に挿絵に注目して検討した結果を報告したい。

からくりと式亭三馬の滑稽本

式亭三馬の滑稽本のなかには、からくりと関連する作品が二作ある。ひとつは、『早替胸のからくり』、もうひとつは『人心覗からくり』である。前者の序文には、「まず前編はこれでお替り」とあり、後編を構想していることがわかる。また、後者の序文は、前者の漢文体の序文を踏まえて記されており、「却也胸の機関は如何。且下回の分解を聴け」とあり、両者を正統の関係として式亭三馬はとらえていたようである^②。

人の胸の内、心の内を積り細工として、暴露し滑稽化するのがねらいである。そうしたねらいが、両者の挿絵にも意図的に表現されている。そして、その挿絵が、竹田からくり「傀儡師」を取り入れられることも共通しており、両者の緊密な関係がここからも伺い知れるように思う。かつ、同じ素材を取り入れながらも、全く異なった使い方をしている点も注目すべきであろう。本稿では、二作の挿

絵について、からくりの絵画資料とあわせて考察を加えてみることで、式亭三馬がからくりをどのように取り込み、正統編として構想しているのか、明らかにしてみたい。

なお、本文の引用はすべて棚橋正博『式亭三馬集』（叢書江戸文庫・国書刊行会）による。

一、『早替胸のからくり』

本書見開きの口絵には、早替りの趣向に基づく「新版早替り絵つくし」が配置されている。表紙見返し図には、「切抜繪本浮世七役」と記されている。早替りが当時の歌舞伎でも流行しており、早替りの趣向を取り入れて見開きの口絵にしている。なおかつ本書は、いわゆる仕掛け本になっており、次々と紙面が早替りしていくことを趣向として構成されている。

この見開きの口絵についてはこうした視点から触れられる機会があるものの、表紙見返し図（図1）については従来ほとんど言及されることがなかった。まず、現状確認から進めたい。この見返し図を詳細に見てみると、実は、この見返し図は覗きからくりになっていることがわかる。

具体的に見てみたい。

覗きの箱には、正面に覗きの穴があり、そこから覗きの箱のなか

のからくりを文字通り覗き込んで見ることになる。覗きの箱の上には、傀儡師が描かれており、傀儡師の立っているのは、覗きの箱の上の明かり取りのための格子の枠であり、その背景には、雲と波の模様が描かれた背景がある。背景の左右には「歌川豊国画」（左）「式亭三馬戯作」（右）とあり、これは覗きの箱を開くとそこに演目の絵が描かれていたり、両側に「大からくり」等と記されたりしているのを、絵師と作者の名前を記すことに変えたのである。また、上部には「文化庚午發兌」と記されているが、ここには、通常の覗きの箱では、箱をはね返すと「大からくり」「竹田大からくり」等と記された看板が出てくる仕掛けになっていたようである。覗きの穴の下には「切抜繪本浮世七役 早替胸機關 讀本一卷」と題名が記されているが、言うまでもないが、これは通常の覗きの箱にはもちろん見出すことはできない書き入れである。

ここで、不思議なのは、覗きの箱の上に描かれている傀儡師が何者であるのか。また、傀儡師の背景に、なぜ雲と波の模様が描かれているのかである。

この疑問を解決するために、覗きからくりの絵画資料を検討した結果、竹田からくりにも、覗きからくりをからくり仕掛けで演じさせた演目があり、それが覗きの箱の上に描かれた傀儡師を考える上で有効な情報を提供してくれることがわかった。



図 1

次に掲げる絵がそれである。竹田からくり「邯鄲栄花春」（かんたんゑいぐわのはる）である（図2）。これは、東京都立中央図書館所蔵のからくり絵本『機関千種の実生』所収の画像である。画中の本文を以下に記す（改行を加えて読みやすい本文とした）

かざりおきましたるのぞきがらくりは わづかのはこの内へ 千
ぜうじきをつもりましたるさいく

さいしよはほうしの人形かねをうちますると はこはことくひ
らけひろがりますして 千ぜうじきのゑんとかはり 左右の子供は東
西金銀の山こがねしろかねの日りん月りんとなりまする

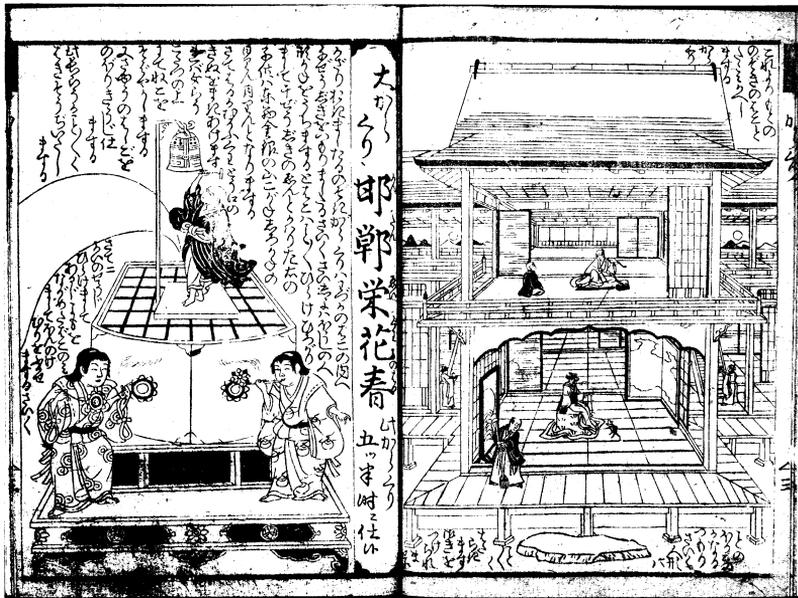


図 2

さてはるかむかふくわとう口のきぬをまきあけますれば 女らう
こたつの上にて ねこをそばやかしまする

又さゆうのはしごをのほりきうじ仕まする 此長らうかことく
くはきそうちいたしまする

さて二かいのせうじひらけまして あるじよもをながめ たばこ
のみまして ほんのけむりをふかせまするさいく (三オ)

ことのほかこまかなるつもりさいく 人形はことくくはたらき
ます御きをつけられませふ これよりもとのぞきのはことた、み
かへしまするからくり (三ウ)

からくり台には二つの覗きの穴を設けた覗きからくりの箱が置か
れている。法師の人形が鐘を打つのに応じて覗きの箱が大きく開い
て千畳敷の飾りが現われ、炬燵に座る女郎と猫、給仕をする小姓、
掃き掃除をする奉公人の所作、二階では煙草を飲む主人、遠くには
日輪月輪が山の端に浮かび上がる。日輪月輪は子供が変じたもので
ある。その後、再び千畳敷の二階建ての座敷が畳み込まれて、もと
の覗きの箱にもどるといふからくりである。子供も、おそらく、同
じくもとの姿にもどるのであろう。

現存する覗きからくりは、覗きの穴から覗くと、そこに物語や風
景を描いた数枚の絵が次々と変わっていくところを、紐を引くこと
で見せる仕掛けと理解されている。しかし、この演目を見ていると、

覗きからくりが、かつてはからくり人形や建物や景観が箱の中で動
き、次々と変わるありさまを見せたものであることを典型的に示し
ている。そうした覗きからくりをからくり仕掛けで演じさせるのが、
このからくりの眼目である。箱が開くと、広々とした千畳敷の座敷
が現われ、再びもとの箱にもどるといふのがからくりの趣向であつ
た。絵にも、箱から吹き出しが出ており、これは、箱が次に変化し
ていくことを示すための吹き出しである。覗きの箱はふだんは中を
見ることはできないものであるが、からくりでは、その箱を開いて
見せることで、観客の興味を惹きつけたのであろう。竹田からくり
の中でも、大からくりとして演じられた演目である。

この「邯鄲榮花春」と比較してみれば明らかのように、両者の類
似点を発見することができる。繰り返しになるが、まず、「邯鄲榮
花春」の方は二つ、『早替胸のからくり』は九つと数に相違はある
ものの、正面に覗きの穴がある。そして、覗きの箱の上部には、明
かり取りのための障子等を張っているものと推測される格子の板が
はめ込まれている。そして、その箱の背景には、「邯鄲榮花春」に
は何も描かれていないが、一般的に覗きの箱の背景には、覗きから
くりの演目に関連のある背景を描くことが多い。『早替胸のからく
り』の背景に目を移すと、上部に雲、下に波の絵模様を描かれてい
る。では、この雲と波の背景はどのような演目の背景になるのだら

うか。

ここで注目しておきたいのが、「邯鄲采花春」の法師人形である。この人形が鐘を打つのに応じて、覗きの箱が開いていくという設定になっており、いわば幕開きの役割を果たすからくり人形ということになる。他の覗きの箱を描いた絵画資料に、明かり取りの格子の上の人形を置いているものを見たことがない。竹田からくりでは、法師人形が定番であったようである。『早替胸のからくり』の覗きの箱の上に描かれている傀儡師は、まさに、この法師人形に相当する、からくり人形であることになる。

これが傀儡師人形であるならば、背景の雲と波も説明がつくのではないか。すなわち、竹田からくり「傀儡師」では、傀儡師が箱でまわす唐子踊りの場面から、「舟弁慶」の場面へと舞台が転換する。そして、「舟弁慶」の場面では、西海に漕ぎ出す義経主従の舟と平知盛の幽霊が中心であり、海上の波と押し寄せる黒雲が、能の『舟弁慶』同様に取り合わされている。ただし、黒雲を形象化したものは少ない。式亭三馬には、「舟弁慶」の場面には雲と波がつきものであるという理解があったのであろう。

竹田からくり「傀儡師」を取り込んだ式亭三馬の滑稽本としては次章に掲げる「人心覗からくり」の冒頭の口絵が注目される。そこには、傀儡師の箱から湧き出る吹き出しの上に猪牙舟が描かれてお

り、その吹き出しの模様が波模様であり、また、もう一方の吹き出しには駕籠かきが描かれており、これが雲模様になっている。つまり、この覗きの箱の背景は、からくり「傀儡師」で演じられる「舟弁慶」の場面のために設けられたものと考えられる。

このように『早替胸のからくり』の見返し図に描かれているのは、覗きからくりであり、さらに、そこに「傀儡師」のからくり人形が複合していることになる。すなわち、覗きの箱の上部に描かれている傀儡師は、竹田からくり「傀儡師」の人形をデフォルメしたものであり、首から提げた箱を文机に変えて人の心の裏表をうがつ作者に見立て、箱回しで遣う人形二体を仏と鬼に見立てて「善悪邪正胸の機関」を表わしたものと考えられる。

そのように考えると、『早替胸のからくり』の表紙見返し図には、すでに『人心覗からくり』という覗きからくりの構想が示されていることになり、式亭三馬が当初からの二作を正統二編としてとらえていたことがわかる。この表紙見返し図は、本書の幕開きを示す役割を果たす傀儡師人形であるとともに、この図が、『人心覗からくり』の口絵の「傀儡師」と一体の趣向として構想されていたと言えるのではなからうか。

二、「人心覗からくり」の口絵

『人心覗からくり』には見開きの口絵(図3)があり、その図柄が竹田からくり「傀儡師」のもじりになっている。次に掲げるのは、竹田からくりの絵尺し『機関竹の林』に所収されている「大からくり傀儡師當松弁慶」である(図4)。これについては、すでに拙稿において詳細に論じているので、そちらを参照いただくこととして、展開の部分を簡単にまとめておく。^③

図のなかに1から8の番号を付しておいたのだが、それにしたがって、整理すると、1、2で口上人の最初の中からくりについての概略の説明がある。傍線を付したように傀儡師のからくり人形が首から提げている箱で唐子踊りを演じ、その後唐子人形が箱のなかに納まり、やがて、傀儡師の人形が畳み込まれ、舟弁慶の場面になることがわかる。唐子の踊りは唐人歌あるいは歌三味線等とあり、歌を伴っている。そして、おそらく、3で、傀儡師が舟に変わる間に傀儡師人形の置かれている台座が波に変わる。

ここから舟弁慶の場面となって、謡に合わせて、それぞれの人形がごとごとく働く。4で、舟人は櫓を漕ぎ続ける。やがて、5となり、波間から平知盛の怨霊が現われ、足拍子をととり、さまざまに薙刀を使い、義経一行に怨みをなす。6で、義経は長絹を脱ぎ、太刀

を抜いて知盛に立ち向かう。続けて7で、弁慶は数珠を押し揉んで知盛の怨霊を禱り伏せる。

そして、知盛が波間に消えると、舟弁慶の場面は終わり、またもとの傀儡師人形に戻る。その後、8で、箱のなから山猫が出て、さまざまに働く。『竹田新からくり』によれば、山猫が飛び出す仕掛けになっていたことがわかる。

以上が、絵画資料から読み取ることのできる竹田からくり「傀儡師」の展開である。大きく分類すれば、唐子踊りと舟弁慶、山猫まわしの三段で構成されている。もちろん、舟弁慶が中心であることは言うまでもない。このからくりは、こうした異なった種類と場面の中からくりが、連続した動きとして次々と展開していくところが興味深い。

ここで、あらためて『人心覗からくり』の口絵を見てみると、口絵全体がこの竹田からくり「傀儡師」のパロディーになっていることが明確になる。

すなわち、中央の頭巾を被っている猿が、傀儡師人形をもじったものであることは明らかであり、口絵本文に「受け難き人の形は備はれども、心は獣にも劣りて悪しき行ひをする。所謂人面獸心の形也。智恵才覚あるやうに見すれども、毛の三本足らぬ猿利口に表したり」とあり、人間の内面を「猿」に見立てて、戯画化しようとする



図 3



図 4

る意図が示されており、傀儡師を猿傀儡師に変換していることがわかる。おもしろいのは傀儡師の載っているからくり台に「酒」「色」「財」とあり、これらにとらわれると、傀儡師もこのような猿の姿になるといふ暗示になっている。このからくり台の下に「西宮傀儡師の結句に曰く、酒色財に迷ふ者借金山猫に嚙そ云々」とあり、酒色財に溺れる者は、山猫に嚙ませようという「傀儡師」の結句になぞらえて、放蕩を慎しむように説いている。

これは傀儡師が人形まわしの最後に子供たちを驚かせようと、山猫を遣う短い唄の結句であり、竹田からくりの「傀儡師」の山猫遊びの最後に箱から山猫が飛び出していく演技と同じである。愛知県半田市亀崎に伝承されているからくり「傀儡師」には、その結句がそのまま伝えられている。それによれば、「子供衆、子供衆、悪いことをせまいぞや、悪いことをしたもには、山猫に嚙ましょ、獣に嚙ましょ、スツペラボンノボン」と囃したことがわかる。そして、この「酒」「色」「財」のからくり台の変化は、竹田からくりの絵尽しでは、傀儡師人形が折り畳まれて、舟弁慶の大物の浦の場面へと転換していくのに対応して、からくり台の正面が「波」に変化したものである。口絵の作者はこうしたからくりの動態を熟知していたものと考えられる。それは、以後の比較考察の中で明らかになっていくことになる。その意味で言えば、傀儡師人形が猿の傀儡師に変

身したという文脈を想定して読むべきであろう。これが前述した、「早替胸のからくり」の表紙見返し図の傀儡師が変じた猿傀儡師という解釈もできるかもしれない。

続けて、「人心覗からくり」の口絵には、首から提げた箱の上で、ふたりの「美女」が踊るさまが描かれており、画中の本文には「二人の美女ひつくり返れば古狸の骨頂、大きな山猫と変はる」とある。この本文は、竹田からくりの唐子踊りと最後の山猫まわしの演技を踏まえているが、ここは美女が山猫に変身するというように変更を加えている。竹田からくりでは、演技の冒頭に唐子踊りがあり、最後に山猫遊びが設けられており、その間に舟弁慶が劇中劇のように配されている。すなわち、竹田からくりでは、唐子が山猫に変身するのではなく、唐子も山猫も、そして義経王徒を乗せた舟までも、同じ箱の中から次々と手品のように現われる演技・演出が行われている。「人心覗からくり」では、美女も一皮むけば山猫であると、人間の心理の表裏を表わしており、その古狸から竹田からくりのラストに登場する山猫に結びつけたのであろう。

また、細かなことであるが、この箱の中央には、狐が袴姿でお辞儀をしている様子が描かれているが、これも傀儡師の箱に描かれている袴姿の鼓を打つ人を狐に変形して用いたものであり、細かなところまで利用していることがわかる。傀儡師が、人形を操る箱を軽

く打って、調子をとる箱鼓から、鼓打ちの姿がシンボルとして箱に備えられたのであろう。その箱には、「色を争ふ女狐に化かされ、君子の眼には馬の小使とも見なすべき酒にほだされ、我が一生を誤つた稲荷様」とあり、色と酒におぼれて財を失い、一生を棒に振ってしまふお稲荷様と皮肉っており、これも、下敷きになる絵を前提にしなければ描けない図柄であることがわかる。

これらの傀儡師人形とその周辺から、視点を移して右側の「むかふ水」を検討してみよう。これは、竹田からくりの絵尺では、舟弁慶の場面で義経主従が舟に乗って西海に乗り出したところに対応している。この舟弁慶の場面は、実は、傀儡師人形の上半身が箱の中に折り畳まれて姿を消した後、箱の上に義経主従と船頭を乗せた舟が出現するという展開である。そして、このからくりの場面転換を、箱の中から出ている吹き出しで表現している。口絵を見れば、吹き出しが波模様が変わっているが、同じく箱の中から波が吹き出している構図が一致しており、この口絵がこうした構図の絵をもとにして描かれていると考えられる。しかも、箱の中から、箱よりも寸法の長い舟が出現してくるというところが見せ場になっており、舟弁慶の場面が終わると、再び、舟は畳み込まれて箱の中におさまり、傀儡師人形が元の姿に戻るといふ展開になっている。そうした竹田からくりの演技の展開を前提にして、口絵の本文を読んでみる

と、からくりの展開を踏まえた文章として書かれていることは明らかである。次に本文を引用する。

今日は真面目に儉約をする胸の機関も友達に誘はれて、気狂ひ水の勢ひ勝れば、向ふ水に舟を浮かめて、柳橋から乗らうとか、新地のはなを乗つきれとか、水遊びの水機関、算段返り愚に返り、様々にひつくり返ること、猪牙舟の二人船頭よりも速やか也

まさに傀儡師から舟弁慶、舟弁慶から傀儡師へと次々とひつくり返って展開していく竹田からくり「傀儡師」を踏まえているからこそ書くことのできる本文といえるだろう。儉約をしようと思つたところ、友達を誘いを断りきれずに吉原へ行く猪牙舟に乗つてしまふという場面をとらえているが、これが義経主従の船出に重ねられており、義経、弁慶、舟子という取り合わせを、吉原に遊びに行く客と猪牙舟の船頭に置き換えている。

次に「やみ雲」の方も同様に検討を加えてみる。この図柄は、舟弁慶が登場する平知盛の幽霊をもじつたものである。知盛の長刀を駕籠かきの息杖に置き換えており、儉約を心がけぬものは、あつという間に凋落の憂き目に遭うことを説く本文になっている。

家をも惜しまず、身をも惜しまぬうつけ者の大風なるは、家をも惜しみ、身をも惜しむ利発者の各坊に世を譲りて、遂には

薦被りとなり果て、後さらに悔むとも甲斐なし。

この駕籠かきの息杖に知盛の幽霊の長刀が見立てられているとすれば、驕る平家は久しからず、ついに西海に沈む運命をたどるということを暗示しているとも読める。また、二人の駕籠かきの足下には、雲が箱から湧き出ている。これも先の義経主従の舟から吹き出す波模様と同様に、傀儡師の箱から雲形模様が吹き出している。これは、「やみ雲」にひっかけた表現でもあるが、同時に、「傀儡師」の中に登場する知盛の幽霊と重ね合わせた時に、知盛の幽霊の白波を雲に見立てたものであろう。北斎の歳旦摺物にも「傀儡師」の七福神の見立て図があり、ここでは知盛が毘沙門天に見立てられている^④。やはり、雲形の吹き出しが使われており、箱の中から雲が湧き出している。これもやはり、からくり絵尽しを大胆に翻案した結果と見たい。ちなみに、この摺物の舟も波模様の吹き出しの上に描かれている。

このように「人心覗からくり」の見開きの口絵は、竹田からくり「傀儡師」の絵尽しや絵本をもとにして、人間の心理の表裏を滑稽化して、積り細工になぞらえて表現しており、作品内容とも密接に関連したものと構想されていることがわかる。

三、その他のからくり

その他のからくりについても、触れておきたい。まず、左上の宴席の様子がからくり台の上で演じられており、その大尺の胸から吹き出しで薦を着たみすばらしい姿に成り代わった大尺の成れの果てが描かれており、これは、宴席から薦被りの独り酒の場面へと変化することを記すからくりの絵の描法である。「大酒食らひ、酒だ大飲みが、つりのり細工とは此ことだらう。小お薦になりて初めて眼が覚むれど、まだ悪い地口が止まず」。大酒飲みの末路をたどる豪勢な宴席に流れる「酒にあかさぬ夜半もなし」という唄が皮肉である。これらの宴席の人物が座っている座敷の場面がしつらえられているのが、まさにからくり台そのものである。こうした場面転換を伴うからくりは種々考えられるが、これのものになった特定のからくりを指定することはむずかしい。

もうひとつの蔵のからくりについても、同巧のからくりがあったものかと推測されるが、やはり、これと特定できるものは見出すことができない。ただし、蔵から吹き出しが出て、そこに紙衣姿のやつしの二枚目が描かれており、これも立派な若旦那が凋落し、紙衣姿に身をやつすことになった顛末をからくり仕立てにしたものであろう。「身代の大機関、角屋敷を畳んでとると、忽ち百貫の肩に編

笠一蓋となる。紙衣着て川へはまる、といふ喩の通り、とかく酔が川へはまる」「手拍子編笠といふていたらく、手拍子打つひまに、大尺替はつて紙衣姿となる。これ皆悪い胸の機関にして、ぜんまいの狂ふ故也」と口絵本文にある。この場面での蔵入りのからくりはたとえば、近松の『傾城反魂香』の下之巻大切りの挿絵にも描かれており、富の象徴としての蔵が、からくりでも同様に趣向として構えられたのである。『傾城反魂香』には、「こま引銭くらと成からくり」「まご手足をはこび歌にのりくらへ入からくり」とある。ここでは、蔵も絵銭が変化したものである。ただし、これは蔵入りのからくりであり、本書では蔵出しのからくりとも言うべきものであり、別種のからくりを想定する方がいいかもしれない。ただ、蔵を趣向としたからくりが存在した可能性は高いだろう。

おわりに

式亭三馬の『早替胸のからくり』と『人心覗からくり』における竹田からくりの翻案・利用の方法に注目して、比較検討を加えた。

その結果、二作の間に、連続性が認められ、作者が当初から正統編として構想していた可能性が高いことを指摘した。それは、『早替胸のからくり』の表紙見返し図と『人心覗からくり』の見開き口絵が、からくり「傀儡師」を媒介してつながっており、緊密な関係

からくりと式亭三馬の滑稽本

を指摘することができるということである。芸能・演劇書に通じた式亭三馬なればこそ、趣向取りであり、作文であったと言えよう。なおかつ、早替りやからくりを用いて、人間の心理の裏表を鋭くうがってみせたものであり、それをふたつの切り口で、それぞれに角度を変えながら、一体のものとして表現した。『早替胸のからくり』では、人の心の変化として、『人心覗からくり』では、人の心の裏表として、それぞれに人間の心理をおもしろおかしく、時には鋭くえぐり取るように描いている。

本稿では、からくり研究の立場から、式亭三馬の滑稽本の挿絵について検討を加えてみた。そこから見えてきたのは、作者のからくりについての興味と知識であり、滑稽本としての趣向の多様性である。実は、今回取り上げた表紙見返し図や口絵にとどまらず、作品の描写や構成にもからくりの影響が及んでいるようであり、それらについては別稿を期したい。

注

① 拙稿「からくりと浮世草子」『同志社国文学』四五号・一九九六年二月。

② 『早替胸のからくり』と『人心覗からくり』の二作の序文を掲げる。両者を比較すれば、前者の本文をそのまま引用している箇所が多く見られ、あきらかに後者が前者を下敷きにしていることが確認できる。

夫天地之大機関既造物者之奇巧而或戰場之斬兮撲兮或妓樓之拍兮舞兮有熊坂則有牛若塩谷則有師直善悪各在御一人前而禍福即從於操糸猶山海一瞬転両国橋爛漫花見之体悉及認御目則忽然現夜分之景色矢作長者御殿搦瓦落離而転変則觀作駒籠八百屋八百屋也盛衰栄枯喜怒哀楽今人先様幸不幸所為機巧而在於仕懸之狂与不狂也光陰如箭其題転来日月如荏口上舌不及寔可謂先方御姿御換也人間一生五十年周天三百六十日皆是胸之機巧哉（『早替胸のからくり』）

天地の大機関は、造物者の老大奇巧にして、和蘭眼鏡の及ぶ所にあらず。人間の機巧は、神儒仏の樞木偶人にして、竹田近江の操む所にあらず。喜怒哀楽は操の糸に縦て移り、高貴貧賤は機車の高低に從て変る。抑盛衰栄枯を機巧の模様に見れば、釜山海一瞬に両国橋と転じ、爛漫たる花見の体悉くお目が認めれば、忽然として夜分の景色を現し、矢作の長者の御殿搦瓦落離として台が変れば、八百屋くくと為が如し。抑新送古の幸不幸、機車の狂ふと不狂とにあり。光陰箭のごとく其題姿てまゐる。日月荏の如く舌客の舌もおよばず。夢幻泡沫の瞬する間に、千秋万歳これに到頭、什麼好巧にあらずや。生死流転の迅きこと、有為転変の速なることを想へば、寔に先さまはお変わりく。却也胸の機関は如何。且下回の分解を聴け。（後略）（『人心覗からくり』）

③ 拙稿「竹田からくり『傀儡師』について——フィールドと文学史の接点——」（『歌舞伎研究と批評』十二号）一九九三年二月。

④ ③に同じ。